

一般社団法人日本WPAは昨年9月に社団法人化し、さらなるサービスの提供や環境を意識した印刷技術の発展を目指している。また、近年ではカーボンオフセット事業などにも取り組むなど新しい事業にも積極的に関与している。そこで日本WPAの田島久義会長（株式会社代表取締役社長）に今後の方向性や取組みについて話を聞いた。

—2010年は社団法人化するなど日本WPAでは大きな動きがありました。



田島 昨年は5月に第8期定期総会を、9月には社団法人の設立総会を開催しました。5月の総会で不偏化と国際化を目指していくという大きなテーマとして掲げました。今後もこのテーマに沿って活動していきますが、法人化したのは会員の増加により協会の規模も大きくなってきたのでさらなる透明化を図り、しっかりとした活動を行っていききたいという理由

からです。団体としては非営利を目指し、協会内で購買部を立ち上げ、利益のない形でカーボンオフセットやW2インキ、DI版を販売しています。これらは会員企業へのサービスというで行っています。このほか工場見学やセミナーなども開催しています。

また不偏化の流れとしてカーボンオフセット、カーボンフットプリントがあります。両方とも水なし印刷を基盤としながらも、従来の印刷でも通用する環境負荷の低減につながる技術として進めています。

カーボンオフセットでは現在の2010年1月時点で800トンのCO₂という累計を達成しており、環境面で大きく貢献することも会員企業の受注増にも貢献しています。その元となるCO₂排出量算定ソフトウェア(CGS(Printing Goes Green))もパースワードの設定や使用契約を締結し、研修を受けて認証した企業のみ使用を認めるなど一つの

システムとして確立させ、カーボンオフセットの信頼性を担保しています。

—国際化に関してはいかがでしょうか。

田島 もともとWPAは国際組織でシカゴに本部があります。現時点ではヨーロッパ、アメリカ、日本に拠点がありますが、日本WPAにはアジアの企業も参加しており、アジア各国、特に中国で積極的に展開しているところがあります。

—昨年のエコプロダクツでは多くの会員が出展しました。

田島 単独で出展している会員企業もありましたがWPAのブース内で合同出展のような形式での出展もありました。これもとても好評で、会員企業の方々が積極的に宣伝をしていたので非常に活気のあるブースになったと思います。

—会場内では秤マークの付いた印刷物が多く配布されていました。

田島 WPAでもパンフレットを新たに作成し、こ

れには秤マークが入っています。商業印刷としては9番目の認証となっています。会場内で配布された秤マーク入りの印刷物のほとんどは水なし印刷で印刷されており、環境に優しい印刷物。水なし印刷が浸透してきたと思います。

—こうした中で積極的に取り組まれているカーボンフットプリント(CFP)事業についてお聞かせください。

田島 CFPについてはわれわれは2008年から取り組んでいます。カーボンオフセット事業もCFPPの研究から派生した事業です。昨年までは、最終財として排出量を計算するルールができていなかったのですが、印刷物にはマークを入れられなかったのですが、現在では可能になっており、会員向けのCFPPの事業化に取り組んでいます。

実際にCFPPマークの検証を受けてみて感じたのですが、非常に細かい数値が求められたり、多くの時間を要したり、留意すべき点が多々あると思いました。

このような中で事業化の環境としてWebinarというウェブセミナーを昨年末から開催しています。ここでは秤マークを印刷物に入れるためのノウハウや実際に申請を行った会員企業の話をお聞かせできます。どなたでも日本WPAのホームページから閲覧できますので、秤マークを知りたい、秤マークとはどういったものかを知りたいといった方は、ぜひ、視聴い

社団法人 日本WPA 田島久義会長に聞く

水なし印刷基盤に環境負荷低減へ

ただればと思います。

「Webinar」以外の取組みとしてはどのようなものがありますか。

田島 現在はカーボンフットプリントの国際規格化（ISO14067）を目指しているという動きがあります。ISO化する中でCO₂排出量算定がより簡素化すると思えますので、これを見据えてPGGの国際化とCFPとの整合性を検討しています。その一つがクラウド化です。細かい改良をしてもユーザーへの反映が不確実ですので、ソフトの中核部分

は、サーバー内に置いて、ばと思っています。

ユーザーがサーバーに入力データを送り、計算結果をサーバーから返すといったサーバープロバイダー化を目指しています。これにより2次データや保管データがすべて最新の状態で使用でき、計算結果の正確性を担保できます。

田島 PGGの国際化については、海外のデータベースも考慮し、英語版も作成。世界の流れを組み込んだ形で将来ISO化された時のCFPとLCAを統合するための指標作りにな

る。これは各地方の自治体や環境負荷の低減に取り組み、それをクレジット化し配分するという日本で初めて

の取組みです。また会員企業も毎年増えています。国際化の一つとして中国を中心に会員増



WPAの新しいパンフレットには秤マークが入っている

加を検討しています。中国では水なし印刷は高品質の印刷技術として知られ、ダブルデッカーでもファンナウトが発生しない印刷として注目されています。現在は10社ほどが水なし印刷を採用していま

2つの「エコ」推進

サーマルCTP出力 完全対応

東レ

東レ㈱が展開している水なしCTP版はサーマルCTP出力に完全対応している。各社サーマルCTPセッターに対応し、環境負荷低減印刷推進とランニングコスト削減に貢献しエコマシーとエコロジーの両立を可能にしている。

湿し水を使用しない水なし印刷はファンアウトが少なく見当合わせが容易で版の出力調整やユニット胴ごとの仕立ての変更もなく立ち上がり時間を大幅に短縮することができ、このほかにもドットゲイン変動も少ないため、設定したキャリブレーションデータを忠実に再現し、過乳化による下

ットゲインもないので常にシャープな網点を得ることができ、微小な網点を配したランダムドットのFMSクリーニングにも最適。よく比較材料として挙げられるのが水あり印刷と同様の品質を得られるのだから、水なし印刷では

同社の水なしCTP版はエッチ液、IPAを使用しないので環境に配慮した印刷が、水なし印刷では

同様に現像工程における回収廃液が発生しないので水なし印刷に移行することによりこれらの薬品・廃液代のコストカットが可能となる。

また見当が決まりやすいため予備紙も少なく、湿し水などの変動要因による稼働中の機械停止が少なくなったのに、紙の発生率を下げることができ、用紙代コストダウンにつながることもできる。

最近では環境対応というフレーズが多く聞かれる

が、改正大気汚染防止法の施行による法規制や日本印刷産業連合会による自主規制などで、工場から排出する揮発性有機化合物（VOC）の低減に取り組まなければならないのが現状である。

水なし印刷を実施することによりVOCを大幅に低減でき、印刷機周辺や工場内、あるいは工場近隣におけるVOCの排出量が減少し、環境立法の遵守や大気汚染の防止を図ることができ

る。